

クロアチアの歴史教育と歴史教科書

石田信一

要旨

本稿は一九九〇年代から現在に至るクロアチアの歴史教育と歴史教科書の問題について概括的な考察を行ったものである。九〇年に社会主義体制を放棄し、九一年にユーゴスラヴィア連邦から離脱して独立を達成したクロアチアは、この二つの変化を歴史教育の分野にも反映させる必要があった。それはクロアチア・ナショナリズムに立脚しつつ、連邦体制下で強調されてきた南スラヴ諸民族の一体的な歴史叙述を放棄し、かつてタブー視されていた〈クロアチア独立国〉などを再評価する動きにあらわれている。

社会主義時代から国定教科書しか存在しなかったクロアチアでは、独立後も一元的な歴史教育が導入されていたが、一九九〇年代末から二〇〇〇年にかけて教科書出版社および教科書の複数化が実現し、各教科書の叙述もようやく一面的なものではなくなった。しかし、全体的にクロアチアの独自性を強調するあまり、周辺諸国との関係さえ理解しにくいほどに叙述のバランスを欠くものとなっており、現在では若干修正されているとはいえ、なお大きな問題となっている。また、教科書の種類の多さに比べると、各教科書の特徴はさほど明確ではなく、この点でも新たな教科書づくりが求められている。

はじめに

二〇世紀初頭に「ヨーロッパの火薬庫」として登場したバルカン諸国は、二度の世界大戦の反省も空しく、一九九〇年代を通じて激しい民族紛争の舞台となった。とりわけ多民族共存の実験場でもあったユーゴスラヴィア連邦の暴力的な解体は、これまでも紛争の原因となってきた偏狭な民族主義がこの地域になお根強く残っていることを証明する結果となった。

このような事態に直面し、一九九〇年代後半になると各国の教育関係者や歴史研究者の間で民族主義を助長する要因としての学校教育、とくに歴史教育の問題が強く認識されるようになった。従来各国で大きな違いを見せていた歴史教科書を見直す動きが本格化し、バルカン諸国に共通する歴史教科書副教材の刊行など、具体的成果があらわれつつある。⁽¹⁾

本稿は、こうした動きに着目しつつ、クロアチアにおける歴史教育と歴史教科書の問題について概括的に考察しようとするものである。なお、クロアチアでは二〇〇〇年に制定されたマイノリティ教育法によりマイノリティが自らの言語・文字・教科書等を用いて学校教育を行うことが制度的に保証されているが（例えば、マイノリティは「母国」の教科書を用いることができる）、ここでは考察の対象としない。このほか、詳細に検討を加えるべき問題点も少なくないが、紙幅の制約もあり別稿としたい。

一．クロアチアにおける教育制度——歴史的概観⁽²⁾

クロアチアではオーストリア＝ハンガリー帝国時代の一八七四年に最初の学校法が制定されてから、一九一八年に始まるセルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国（ユーゴスラヴィア王国）時代、一九四一年に始まる「クロアチア独立国」時代を通じて、教育制度の根本的な変化は見られなかった。その間、名称は変更されながらも、四年制の国民学校を修了後、上級国民学校（四年制）か実業学校（四年制から八年制）かギムナジウム＝普通中学校（八年制）に進むという制度が続いた。ただし、義務教育は当初五年間であったが、一九二九年に八年間に延長された。この八年制の義務教育は、第二次世界大戦後の一時期を除き、現在まで続いている。

第二次世界大戦後、共産党支配下のユーゴスラヴィア連邦において、クロアチアの教育制度に幾つかの変化が見られた。まず、一九五九年の小学校法によって、初等教育（義務教育）は八年制の小学校に一元化された。また、中等教育においても同じような一元化が試みられ、とくに「ブルジョワジーのシンボル」とみなされた八年制のギムナジウムは、一九五八年に四年制の普通中学校に移行することが決定された。さらに、一九七四年の教育改革によって、ギムナジウムが全廃されるとともに、中学校では最初の二年間は基礎教育、残りの二年間は専門教育を行うこととなった。もっとも、この教育改革には問題点も多く、一九八〇年代を通じて、さらなる改革を求める議論が高まっていた。

一九九一年にクロアチアがユーゴスラヴィア連邦を離脱し、独立を達成すると、新しい教育制度が導入された。⁽³⁾しかし、それは旧来のモデルに回帰したものであり、八年制の小学校 (osnovna skola) は維持しながらも、中等教育レベルでギムナジウム (gimnazija)、実業学校 (専門学校) (strucna skola)、芸術学校 (umjetnička skola) という区分を復活させたことが特徴である。実業学校 (専門学校) と芸術学校は必ずしも四年制ではなく、とくに職業教育を行う実業学校 (専門学校) は三年制となっている。この制度は現在でも継続しており、カリキュラム上の改革はともかく、教育制度そのものの再編は当面はなさそうである。なお、二〇〇三／〇四年度には、初等教育機関 (小学校) は二一三八校 (約四〇万人の児童・生徒)、中等教育機関 (ギムナジウムその他) は六六五校 (約二〇万人の生徒) あった。⁽⁴⁾

現在のクロアチアで高等教育を担っているのは、基本的に四年制である大学 (svuciliste) および芸術アカデミー (umjetnička akademija) として二年制ないし三年制であるポリテクニク (veluciliste) および高等専門学校 (visoka skola) である。大学は、一八七四年に創立されたザグレブ大学が約一〇〇年にわたって唯一の正規の大学であったが、一九七〇年代にリエカ大学、スピリト大学、オシエク大学が相次いで創立された。二〇〇〇年代に入って、ザダル大学とドゥブロヴニク大学がいずれもスピリト大学から分離したため、現在では六つの大学がある。このほか、二〇〇二年度には、ポリテクニクが七校、高等専門学校が二四校となっている。すべての高等教育機関に在籍する学生数は約

一二万であるが、そのうちザグレブ大学だけでも五万人以上に達している。⁽⁵⁾

一九八〇年代から九〇年代初頭にかけて、高等教育機関の一元化がはかられた時期があるが、この制度も旧来の二元的モデルに回帰している。ヨーロッパ諸国の大多数がこうした二元的な高等教育制度を採用しているが、少なくとも二〇〇〇年度においては多くの旧東欧社会主義諸国 (チェコ、スロヴァキア、ルーマニア、セルビア・モンテネグロ、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、アルバニア) が一元的な高等教育制度を維持しており、クロアチアの早急な対応は特別な意味を持つと考えられる。⁽⁶⁾

二. 現在のカリキュラム

クロアチアにおける現在の教育制度は、一九九〇年の小学校法⁽⁷⁾、一九九二年の中学校法⁽⁸⁾、一九九三年の高等教育機関法⁽⁹⁾に基づくものである。また、教科書に関しては、二〇〇〇年の小中学校教科書法⁽¹⁰⁾によって規定されている。

すでに述べたように、クロアチアの小学校は八年制を採用しているが、カリキュラム上は前期四年間と後期四年間に分けることができる。小学校前期の授業科目は、「クロアチア語」、「美術」、「音楽」、「外国語」(英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語)、「数学」、「自然(理科)と社会」、そして「保健体育」である。このほか、選択科目として「宗教」がある(この「宗教」は事実上ローマカトリックを指す)。

小学校後期の授業科目は、新たに「技術」が加わることで、前期の

表1：小学校の授業モデル（一週間あたり授業時間）

科目	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年
クロアチア語	6	6	6	6	5	4	4	4
美術	1	1	1	1	2	2	1	1
音楽	1	1	1	1	2	2	1	1
外国語				2	3	3	3	3
数学	5	5	5	5	4	4	4	4
自然					2	2		
生物							2	2
化学							2	2
物理							2	2
自然と社会	2	2	3	3				
歴史					1	2	2	2
地理					1	2	2	2
技術					2	2	1	1
保健体育	3	3	3	2	2	2	2	2
その他	5	5	5	5	6	6	5	5
合計	22	22	23	24	30	30	30	30

※ここで「その他」としたものは、選択科目や課外活動などを指す。

ギムナジウムの授業科目は、「クロアチア語」、「第一外国語」（英語、ドイツ語、フランス語）、「第二外国語」（英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語）、「ラテン語」、「ギリシア語」、「美術」、「音

「自然（理科）と社会」が細分化されることが特徴である。このうち、社会に該当する部分は「歴史」および「地理」となる。また、自然（理科）に該当する部分は、五年生・六年生では「自然（理科）」だが、七年生・八年生では「生物」、「物理」、「化学」に分けられている。科目ごとの一週間あたり授業時数は、表1の通りである（典拠は注(3)）。

表2：中学校（ギムナジウム）の授業モデル（一週間あたり授業時間）

科目	文科系				理科系			
	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年
クロアチア語	4	4	4	4	4	4	4	4
第1外国語	3	3	3	3	3	3	3	3
第2外国語					2	2	2	2
ラテン語	3	3	3	3				
ギリシャ語	3	3	3	3				
美術	1	1	1	1	1	1		
音楽	1	1	1	1	1	1		
心理学			1				1	
論理学			1				1	
哲学				2				2
社会学			2				1	
歴史	2	2	2	2	2	2	2	2
地理	2	2	1	2	2	2	2	2
数学	4	4	3	3	4	4	5	5
物理	2	2	2	2	3	3	3	3
化学	2	2	2	2	2	2	2	2
生物	2	2	2	2	2	2	2	2
情報		2			2	2	2	2
保健体育	2	2	2	2	2	2	2	2
合計	31	33	33	33	32	32	32	32

楽」、「心理学」（三年生のみ）、「論理学」（三年生のみ）、「哲学」（四年生のみ）、「社会学」（三年生のみ）、「歴史」、「地理」、「政治・経済」（選択）、「数学」、「物理」、「化学」、「生物」、「情報」（理科系を除き一年生もしくは二年生のみ）、「倫理」（選択）、「宗教」（選択）である。授業科目は基本的に選択制であり、科目ごとの一週間あたり授業時数は学校によってまちまちであるが、文科系コースおよび理科系コースの授業モデルは表2の通りである（典拠は注(3)）。

なお、実業学校（専門学校）および芸術学校は独自のカリキュラムを編成しており、授業時間のみならず、多くの場合は使用する教科書もギムナジウムとは異なっている。

教科書は文部科学省による認定制度が採用されている。人口五〇〇万足らずの小国としては、教科書出版社の数も教科書の種類も豊富である。二〇〇四／〇五年度現在、教科書出版社は五五社、教科書の種類は小学校（八学年）で三五八種類、ギムナジウム（四学年）で二一七種類、実業学校（専門学校）で四七八種類に達する。¹¹旧ユーゴスラヴィア連邦では共和国・自治州ごとに独自の教科書出版社が存在し、クロアチアではシュコルスカ・クニガ社がその役割を担ってきたが、例えば歴史教科書に関する限り、一九九六年にアルファ社とビーロテフニカ社が参入し、複数の教科書の選択が可能となった。

現在クロアチアでは初等教育における授業科目ごとの指針として「知のカタログ」が作成されている。これにより、量的にも質的にも大きな変化が見込まれている。日本における教育改革と同じく、全体的に学習すべき項目が大幅に削減される傾向にある。二〇〇六／〇七年度までに「知のカタログ」が最終版となり、新たなカリキュラムに基づく初等教育が始まる予定である。

三. 初等教育における「歴史」(一)

小学校における歴史教育は、五年生から八年生の「歴史」を通じて実現されているが、一年生から四年生の「自然（理科）と社会」にも郷土

史などの歴史的内容が含まれている。例えば、三年生の「自然（理科）と社会」の副読本として、シュコルスカ・クニガ社から県別に編成された約二〇種類の「私の郷土」シリーズが刊行されており、前半部に地理的内容、後半部に歴史的内容が盛り込まれている。

小学校の「歴史」教科書は、各学年向けの四分冊となっており、古代から現代までの時代順で構成されている。五年生で古代史、六年生で中世・近世史、七年生で近代史、八年生で現代史を学ぶことになっている。どの教科書も、全体的な構成はほぼ同じである。二〇〇四／〇五年度には、五つの出版社から二六種類の小学校向け歴史教科書が刊行された。五つの出版社とは、アルファ社、シュコルスカ・クニガ社、プロフィール・インターナショナル社、メリディヤニ社、リエヴァク社であり、このうちシュコルスカ・クニガ社とプロフィール・インターナショナル社は全学年を通じて二種類の教科書を刊行している。またリエヴァク社は、この時点では五年生向け教科書と六年生向け教科書しか刊行していない。結果的に「歴史」教科書は五年生向け七種類、六年生向け七種類、七年生向け六種類、八年生向け六種類で、合計二六種類となっている。これらの教科書は例外なくカラー印刷で、地図・写真・イラストなどの図版も豊富である。近年の傾向として、教科書の大規模化が進み、縦二六センチ前後、横二〇センチ前後のものが大半を占めている。もっとも、内容的にはスリム化が進み、例えば社会主義時代末期の小学校七年生向け歴史教科書『人と時代』（シュコルスカ・クニガ社）が二四〇頁に達していたのに対して、¹²同書を引き継ぐ現在のアルファ社の

教科書は一三二頁しかない⁽¹³⁾（一九九六年の初版では一一九頁にまで削減されていたが、再び増加傾向にある）。

教科書のシェアは年度ごとの変化が大きいと思われるが、二〇〇四／〇五年度の採用実績に関しては、表3の通りである（典拠は注(11)）。全体的な傾向としては、シュコルスカ・クニーガ社のシェアが高いが、五年生・六年生向けではメリディヤニ社、七年生・八年生向けではプロフィール・インターナショナル社がこれと競っていることがわかる。

アルファ社の教科書は、ヴェスナ・ムニチバウエル『歴史5』（二〇〇三年版）、アンテ・ピリンほか『歴史6』（二〇〇四年版）、フィリップ・ポトレビツァほか『歴史7』（一九九八年版）、ヨシブ・ユルチェヴィチ『歴史8』（二〇〇

表3：小学校向け「歴史」教科書の採用実績（学級単位）

出版社	5年		6年		7年		8年	
	実数	シェア	実数	シェア	実数	シェア	実数	シェア
アルファ社	103	5.0	94	4.5	231	10.8	56	2.6
シュコルスカ・クニーガ社①	665	32.3	627	30.2	791	36.9	364	16.8
シュコルスカ・クニーガ社②	216	10.5	204	9.8	15	0.7	361	16.7
プロフィール・インターナショナル社①	174	8.4	336	16.2	494	23.0	588	27.2
プロフィール・インターナショナル社②	54	2.6	191	9.2	326	15.2	509	23.5
メリディヤニ社	549	26.6	378	18.2	287	13.4	286	13.2
リエヴァク社	300	14.6	245	11.8	—	—	—	—

〇四年版）である。すでに述べたように、アルファ社は当初シュコルスカ・クニーガ社に代わる教科書出版社として位置づけられ、実際に『歴史7』と『歴史8』は執筆者・内容ともにシュコルスカ・クニーガ社の教科書を継承していた。それは新たな選択肢というより、一九九〇年代のクロアチア・ナショナリズムの絶頂期における「国民史」的な歴史教科書の典拠例ともみなすべきものであった。『歴史7』を除いて、いずれも二〇〇三年から〇四年にかけて新版に移行しているが、そのシェアは芳しいものではない。

シュコルスカ・クニーガ社の教科書は、二つのシリーズがある。ひとつは、イヴァカ・パヴィチチほか『歴史5』（二〇〇〇年版）、イヴォ・マケクほか『歴史6』（二〇〇〇年版）、イヴァカ・パヴィチチほか『歴史7』（二〇〇〇年版）、フルヴォイエ・マトコヴィチほか『歴史8』（二〇〇〇年版）。もうひとつは、フルヴォイエ・クリジェヴァンほか『歴史5』（二〇〇〇年版）、ジェリコ・ブルダルほか『歴史6』（二〇〇〇年版）、イヴァン・ドゥキチほか『歴史7』（二〇〇〇年版）、マヤ・ブルクリヤチチほか『歴史8』（二〇〇〇年版）である。同社の小学校向け「歴史」教科書の新版は、一九九六年にアルファ社と入れ替わる形でほとんど刊行されなくなり、全面的に復活するのは二〇〇〇年のことであつた。

プロフィール・インターナショナル社の教科書も、二つのシリーズがある。ひとつは、ドゥシャ・シャルニチ『歴史5』（二〇〇三年版）、ネヴェン・ブダクほか『現代クロアチアとヨーロッパの形成』（一九九八

年版)、ダミル・アギチチ『歴史7』(一九九八年版)、スニェジャナ・コレン『歴史8』(二〇〇〇年版)。もうひとつは、ティホミル・トンコヴィチ『歴史5』(二〇〇〇年版)、ネヴェン・ブダクほか『歴史6』(二〇〇一年版)、ダミル・アギチチほか『歴史7』(二〇〇一年版)、ヴェスナ・ジュリチ『歴史8』(二〇〇〇年版)である。

メリディヤニ社の教科書は、イヴァナ・マルスートモラドほか『歴史5』(二〇〇三年版)、フルヴォイエ・ペトリチほか『歴史6』(二〇〇三年版)、ミラ・コラルルディミトリエヴィチほか『歴史7』(二〇〇三年版)、ミラ・コラルルディミトリエヴィチほか『歴史8』(二〇〇三年版)である。

最後に、リエヴァク社の教科書は、ヴラディミル・ポサヴェツ『古代の歴史』(二〇〇一年版)、ヴラディミル・ポサヴェツ『中世・近世の歴史』(二〇〇三年版)である。今後は七年生・八年生向けの教科書の刊行が見込まれる。

教科書の執筆者は大学教員も含めて多様である。改版の過程で共同執筆者の差し替えがあるため、同じ執筆者が複数の教科書にまたがって執筆しているケースもある。例えば、ヴラディミル・ポサヴェツはプロフィール・インターナショナル社の教科書を共同執筆していたが、新たにリエヴァク社の教科書を単独で執筆することとなり、複数の出版社から同じ執筆者の教科書が出版される事態が生じている。また、小学校教科書とギムナジウム向け教科書の執筆者は、かなりの程度、重複している。

こうした教科書に加えて、ワークブックの購入が義務づけられている。これは、必ず教科書とペアになっており、必然的に教科書と同じ種類の部数が刊行されることになる。このほか、副読本や歴史地図帳が数社から刊行されている。

四. 初等教育における「歴史」(二)

前述の通り、小学校の「歴史」教科書は各学年向けの四分冊となっており、五年生で古代史、六年生で中世・近世史、七年生で近代史、八年生で現代史を学ぶことになっている。こうした編成は一九九〇年までの社会主義時代(ユーゴスラヴィア連邦時代)から継承されており、旧ユーゴスラヴィア諸国では共通するものである(ただし、スロヴェニアのように小学校における歴史教育が高学年(三学年)のみとなり、歴史教科書も古代・中世史、近世・近代史、現代史の三分冊に再編されている事例がある)。

アルファ社の「歴史」教科書を一例として、教科書の内容(構成)を概観してみよう。¹⁵⁾

五年生向け教科書は「導入」「先史時代の人々の生活と文化」「古代東方の諸民族——最初の国家と文化」「古代ギリシア人の生活と文化」「古代ローマ人の生活と文化」「中世初期」で構成されている。クロアチアとの関わりでは、クロアチアにおける先史時代の遺跡、アドリア海沿岸のギリシア植民地、先住民族としてのイリリア人やケルト人、クロアチアにおけるローマ帝国の属州区分、クロアチア人の移住(到来)などに

ついて触れられている。

また、六年生向け教科書は「中世初期のヨーロッパ（五世紀から一世紀）」「中世初期のクロアチア（一二世紀まで）」「一世紀から一五世紀末までのヨーロッパ」「中世盛期・末期のクロアチアとボスニア（一二世紀から一六世紀初頭まで）」「近世のヨーロッパ（一六世紀から一八世紀半ばまで）」「一六世紀・一七世紀のクロアチア」「一七世紀末から一八世紀半ばまでのクロアチア」で構成されている。まずヨーロッパ史の基礎的な事項を取り上げ、同じ時期の自国史（クロアチア史）について詳述する形をとっているのが特徴である。これは七年生向け・八年生向け教科書でも同じである。

七年生向け教科書は「一八世紀半ばから一九世紀半ばまでの世界」「一八世紀半ばから一九世紀半ばまでのクロアチア」「一八世紀末から一九世紀半ばまでのアルプス・バルカン地域」「資本主義発展期の世界（一九世紀後半）」「資本主義発展期のクロアチア（一九世紀後半）」「第一次世界大戦前の諸事件——バルカン戦争」「第一次世界大戦」で、また八年生向け教科書は「両大戦間期のクロアチアと世界（一九一八年から一九三九年）」「第二次世界大戦の時代（一九三九年から一九四五年）」「第二次世界大戦後の時代（一九四五年から二〇〇〇年まで）」「第二のユーゴスラヴィアにおけるクロアチア（一九四五年から一九九〇年）」「クロアチア独立国家の建設と発展（一九九〇年から二〇〇〇年）」で構成されている。これら近現代史に関する叙述は社会主義時代の教科書と比べて変化がきわめて大きいと思われるが、ここではとくに近代史に

関する叙述について若干の異同を確認しておきたい⁽¹⁶⁾。

まず、現在の教科書では、独自の地域区分として〈アルプス・バルカン地域〉が設定されていることが注目される。こうした用法は必ずしも一般的であるとは思われないが、社会主義時代に同じ連邦国家ユーゴスラヴィアを形成していたスロヴェニア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、ヴォイヴォディナを含むセルビア、モンテネグロを指すものとして理解される。前述の通り、歴史教科書の叙述は社会主義時代と比べて大幅に削減されているが、これらの旧ユーゴスラヴィア諸国に関する叙述がその主たる対象となっている。すでに取り上げた『人と時代』は、一九世紀のスロヴェニア史に一一頁、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ史に一三頁、ヴォイヴォディナを含むセルビア史に二八頁、モンテネグロ史に一一頁、マケドニア史に七頁を割いていた⁽¹⁷⁾。しかし、現在の教科書における叙述は僅かであり、『人と時代』と同じ著者が引き継いでいるアルファ社の教科書の場合⁽¹⁸⁾、スロヴェニア史に二頁、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ史に六頁、ヴォイヴォディナを含むセルビア史に三頁、モンテネグロ史に一頁があてられているに過ぎず、マケドニア史に関する叙述はまったく存在しない。奇妙にも、一九世紀後半の歴史が語られるのはボスニア・ヘルツェゴヴィナのみであり、しかもボスニア・ヘルツェゴヴィナやヴォイヴォディナはクロアチア人その他の諸民族の住む地域として取り上げられているに過ぎない。こうした傾向は他の教科書でも変わらず、歴史叙述としてのバランスを欠く印象を受ける。実際、一九九〇年代の歴史教科書の五七%がクロアチア史に関する内容であったという

指摘もある⁽¹⁹⁾。それは社会主義時代末期、クロアチア共産主義者同盟の指導者ステイペ・シューヴァルの下で、クロアチアの歴史教科書においてクロアチア史の叙述が占める比率が意図的に非常に低く抑えられていたことと好対照をなすものである⁽²⁰⁾。

歴史的事実の評価に関しても、クロアチア国民統合過程の進展が強調される一方で、イリリア運動が限定的とはいえセルビア人の間でも受容されたことやシュトロスマイエルがラチュキとともに南スラヴ統一理念を提唱したことが教科書から抹消されるなど、大きな変化が見られる。とくに、南スラヴ統一国家の形成を決定づけたコルフ宣言に至っては、「クロアチアがオーストリア＝ハンガリー時代にさえ保持しえた自らの主権のあらゆる要素を失うことになった」元凶として位置づけられている⁽²¹⁾。

現代史の叙述にはクロアチア・ナショナリズムが反映されやすく、社会主義時代の評価とはまったく異なる位置づけがなされる項目が少なくない。第二次世界大戦期に関する叙述は、その典型的な事例である。例えば、アルファ社の旧版『歴史8』では、枢軸側の傀儡国家へクロアチア独立国を否定しながらも、中世以来クロアチア民族が維持してきた〈国家性〉を回復する要求と関連づけ、その犯罪行為よりもチュトニク側のクロアチア人に対する〈民族浄化〉の残虐性やパルチザン側のクロアチア市民に対する虐殺行為、いわゆるブライブルク事件を激しく非難する立場が明白にあらわれている⁽²²⁾。現在の新版『歴史8』では、こうした叙述は若干修正されているが、歴史的事実の評価はなお流動的であり、

さらに詳細な分析が必要であると考えられる。

五. 中等教育における「歴史」

中等教育レベルでの歴史教育は、カリキュラムの異なるギムナジウムと実業学校（専門学校）では当然ながら大きな違いがある。それは、教科書の内容・構成の違いにも結びついており、ギムナジウム向け教科書と実業学校（専門学校）向け教科書は明確に区別されている。ここでは、ギムナジウムのケースを取り上げることにする。

現在、ギムナジウムにおける標準的なモデルとしては、一年生で古代史、二年生で中世・近世史、三年生で近代史、四年生で現代史を学ぶことになっている。このように時代順に学んでいく構成は、小学校とまったく同じである。実際、ギムナジウム向け歴史教科書は、小学校と同じく各学年向けの四分冊となっている。むろん、小学校（五年生）向け教科書ではまったく触れられていないクロアチア人の民族的起源について、ギムナジウム（一年生）向け教科書ではゴート説やイラン＝カフカス説といった諸学説を整理しながら詳細に取り上げる事例が見られるが、どの教科書も、全体的な構成は小学校における四分冊の場合とほぼ同じである。なお、こうした四分冊の教科書を用いて四学年を通じて「歴史」を学んでいくカリキュラムは、社会主義時代とは大きく異なっている。かつての中学校向け「歴史」教科書は、一九世紀半ばに至る古代・中世・近世・近代史を第一部、一九世紀後半以降の近現代史を第二部とする二分冊となっていたのである。

クロアチアにおけるギムナジウム向け歴史教科書は、二〇〇四／〇五年度には一六種類となっていた。各学年とも四つの教科書出版社、すなわちアルファ社、シュコルスカ・クニーガ社、プロフィール・インターナショナル社、メリディヤニ社が一種類ずつ刊行している。教科書のシェアは、二〇〇四／〇五年度の採用実績に関しては、表4の通りである（典拠は注(11)）。全体的な傾向としては、プロフィール・インターナショナル社のシェアが高く、これに後発のメリディヤニ社が対抗する形になっていることがわかる。アルファ社とシュコルスカ・クニーガ社の教科書は小学校向けのものとも新版への移行が遅れており、そのことがシェアの低さに反映されていると考えられる。

なお、ギムナジウム以外の中等教育機関、すなわち実業学校（専門学校）で用いられている教科書の出版社およびシェアに関しては、表5を参照されたい（典拠は注(11)）。

表4：中学校（ギムナジウム）向け「歴史」教科書の採用実績（学級単位）

出版社	1年		2年		3年		4年	
	実数	シェア	実数	シェア	実数	シェア	実数	シェア
アルファ社	75	19.5	45	11.5	59	15.4	69	18.3
シュコルスカ・クニーガ社	82	21.3	42	10.7	36	9.3	71	18.8
プロフィール・インターナショナル社	69	17.9	141	36.1	162	42.2	149	39.4
メリディヤニ社	159	41.3	163	41.7	127	33.1	89	23.5

おわりに

クロアチアにおける歴史教育は、一九九〇年代に大きな転換期を迎えた。それはユーゴスラヴィア連邦からの離脱と社会主義体制からの脱却という二重の体制転換に伴うものであった。社会主義時代に反体制クロアチア・ナショナリストとして知られた故フラニョ・トウジマン大統領が築き上げた新生クロアチア国家において、その意向が教育レベルに強く反映されることは避けようのない事態であったと考えられる。しかし、それは必ずしも教育関係者の間で歓迎されたわけではなかった。実際、本稿では僅かにしか触れられなかったが、九〇年代の歴史教科書はクロアチアの独自性を強調するあまり周辺諸国との関係さえ理解しにくいほどに叙述のバランスを欠くものが目につく。これは歴史教育に限った現象ではなく、クロアチア語教育においてもナショナリズムとの関わりが重視され、セルビア人作家はもとより南スラヴ統一理念を訴えたクロアチア人作家までも教科書から排除されたという。

表5：中学校（実業学校）向け「歴史」教科書の採用実績（学級単位）

出版社	三年制1年		四年制1年		四年制2年	
	実数	シェア	実数	シェア	実数	シェア
シュコルスカ・クニーガ社①	54	8.8	136	19.7	140	20.4
シュコルスカ・クニーガ社②	52	8.3	—	—	—	—
ビーロテフニカ社	56	9.1	64	9.3	50	7.3
プロフィール・インターナショナル社	295	47.9	322	46.7	323	47.0
メリディヤニ社	159	25.8	167	24.2	174	25.3

一九九〇年代後半に始まった教科書複数化は、二〇〇〇年にトゥジマン体制が終焉を迎えたことで、より実質的な意味を持つことになった。もっとも、教科書の種類の多さに比べると、各教科書の特徴はそれほど明確ではなく、選択肢としての意味が薄れていることも確かである。周辺諸国との協力も視野に入れながら、クロアチアにおける歴史教育と歴史教科書の動向を今後とも継続的に把握・分析する必要があると思われる。なお、本稿は平成一六年度科学研究費補助金（基盤研究B）（一般）「バルカン諸国歴史教科書の比較研究」（研究代表者・柴宜弘東京大学教授）による研究成果の一部である。

注

- (1) 柴宜弘「バルカン諸国共通の歴史認識をつくる試み」『東欧史研究』二四号（二〇〇二年）、柴宜弘「バルカンで進む歴史副教材の出版」『歴史評論』六三三号（二〇〇二年）等を参照。
- (2) Stefka Batinić, "Hrvatski skolski sustav u XX. stoljeću," *Analiza povijest odgoja*, vol.2, Zagreb, 2003, pp.49-70 等を参照。
- (3) Ministry of Culture and Education, *The Development of Education in the Republic of Croatia*, Zagreb, 1994, Ministarstvo kulture i prosvjete, *Sustav odgoja i obrazovanja u Republici Hrvatskoj. Prijedlog opće koncepcije*, Zagreb, 1994 等を参照。
- (4) *Statistička informacija 2004*, Zagreb, 2004, p.32 ほか。
- (5) *Ibid.*, pp.33-34 ほか。
- (6) Mladen Havelka, *Visoko obrazovanje u Hrvatskoj i europskim zemljama*, Zagreb, 2003 等を参照。
- (7) Zakon o osnovnom školstvu, *Narodne novine*, br.59, 1990.
- (8) Zakon o srednjem školstvu, *Narodne novine*, br.19, 1992.
- (9) Zakon o visokim učilištima, *Narodne novine*, br.96, 1993.
- (10) Zakon o udzbenicima za osnovnu i srednju školu, *Narodne novine*, br.117, 2001.
- (11) クロアチア文部科学省ホームページ (<http://www.mzos.hr/>) 掲載の資料「小学校教科書リスト」(Osnovna skola. Popis odobrenih udzbenika za skolsku godinu 2004/05.)、「ギムナジウム教科書リスト」(Gimnazija. Popis udzbenika za skolsku godinu 2004/05.)、「出版社リスト」(Popis nakladnika s adresama) 等を参照。以下の教科書に関するデータも、すべて出典は同じ。
- (12) Dragutin Pavlicević et al., *Čovjek u svom vremenu 3: udzbenik povijesti za VII. razred osnovne škole*, Zagreb, 1988.
- (13) Filip Potrebica i Dragutin Pavlicević, *Povijest za VIII. razred osnovne škole*, 8. izdanje, Zagreb, 2004.
- (14) Filip Potrebica i Dragutin Pavlicević, *Povijest za VIII. razred osnovne škole*, 1. izdanje, Zagreb, 1996.
- (15) Vesna Munić-Bauer, *Povijest 5: udzbenik za 5. razred osnovne škole*, Zagreb, 2003.
- (16) 社会主義時代から一九九〇年代にかけての移行期における歴史教育の変化

- Wolfgang Hoepken, "History Education and Yugoslav (Dis-) Integration," Melissa K. Bokoroy et al. eds., *State-Society Relations in Yugoslavia, 1945-1992*, London, 1997, pp.79-104 頁註25。
- (17) Dragutin Pavlicevic et al., *Conjck u svom vremenu 3: udzbenik povijesti za VII. razred osnovne skole*, Zagreb, 1988.
- (18) Filip Potrebica i Dragutin Pavlicevic, *Povijest za VII. razred osnovne skole*, 8. izdanje, Zagreb, 2004.
- (19) Alex J. Bellamy, *The Formation of Croatian National Identity*, Manchester U. P., 2003, p.150.
- (20) Ibid., p.147.
- (21) Filip Potrebica i Dragutin Pavlicevic, *Povijest za VII. razred osnovne skole*, 8. izdanje, p.124.
- (22) Ivo Peric, *Povijest za VIII. razred osnovne skole*, 3. izdanje, Zagreb, 1998, pp.63-86.
- (23) Josip Jurcevic i Marija Raic, *Povijest 8: udzbenik za 8. razred osnovne skole*, 1. izdanje, Zagreb, 2004, pp.73-99.